

経済学史の哲学

武藤光朗著

経済哲学

I



創文社

武藤 光朗（むとう・みつろう）

大正3年生れ。東京商科大学卒業。現在 早稲田大学講師。
 主著・『マックス・ウェーバーの人間像』、『経済倫理』（以上
 春秋社）、『社会主義と実存哲学』、『現代日本の革命と反抗』、
 『現代日本の精神状況』（以上 創文社）他。訳書・ヤスパー
 ス『哲学的世界定位—哲学Ⅰ』（創文社）他。

【経済学史の哲学】

昭和四十四年八月五日 昭和四十九年四月二十日 第一刷印刷 第三刷発行		著 者 武 藤 光 朗	発 行 者 久 保 井 理 津 男 東京都千代田区二番町一七	印 刷 者 中 内 佐 光 東京都文京区関口一ノ二四ノ八	発 行 所 一 東 京 都 千 代 田 区 一 番 町 一 七 番 地 区 株 式 會 社 創 文 社	電話 (03) 七二〇一 (代表) 振替 東京九二四七二 郵便番号 一〇七二	定価 一五〇〇円

（落丁・乱丁の際はお取替いたします）

晚印刷・橋本製本

1010-100501-4226

序 文

「経済哲学」という学問分野に、すぐれた思想家が生涯を賭けるに足るほどの豊かな問題が含まれているということは、故左右田喜一郎先生や故杉村広蔵先生が身をもって証明されたところである。

もっとも世間では「経済哲学」といえば、何か認識論や方法論上の難かしい議論をする学問で、現実生活には迂遠なもののように考える先入見が、まだ強いように見うけられる。たしかに「経済哲学」という学問分野を最初に切り開き、その独自性を主張するためには、そのような学問的作業を避けるわけにはいかなかっただろう。しかしそれはあくまで予備的な作業であって、「経済哲学」の本質的内容は、われわれが生きてゆく状況としての経済生活のもつ意味を根源的に問いつめること、そしてわれわれがその中で自己存在として生き抜いてゆくための究極の根拠を徹底的に探求することにある。つまり「経済哲学」とは、われわれの自己存在についての確信の根拠を求めて哲学するはたらきが、経済生活に即して分節化したものにはかならないのである。

昭和二十六年から足かけ三年ほどかかって故カール・ヤスパース先生の『哲学』の第一巻「哲学的世界定位」の翻訳をしているうちに、「経済哲学」について私はこのように考えるようになった。

ヤスパース先生の『哲学』全三巻は、第一巻「哲学的世界定位」、第二巻「実存開明」、第三巻「形而上学」となっている。私の訳したのは第一巻だけで、予備的な方向づけに相当する部分であるが、このヤスパース先生の『哲学』全三巻の構成は、左右田・杉村両先生から伝承した「経済哲学」にもあてはまるように思われてきたのである。

それ以来二十年近くの歳月が流れ去った。

仕事は遅々として進まなかったが、昭和三十年と三十三年に公けにした『経済倫理』（春秋社刊）と『社会主義と実存哲学』（創文社刊）は、それぞれ「経済哲学」の本質的内容への接近を意図したものだ。これに対して「経済哲学的世界定位」を内容とする本巻は、経済哲学することへの予備的方向づけを試みたものとして読んでいただきたい。

*

左右田喜一郎先生が「経済哲学」の可能性を提唱されてからすでに半世紀、杉村広蔵先生が『経済哲学の基本問題』を世に問われてから三十年余の歳月が流れ去った。いま両先生はすでに亡く、またこれまでの三十余年間、哲学するうえで心の師として私が仰いできたカール・ヤスパース先生も、今年二月二十六日遂に逝去されてしまった。今この本を公けにするにあたって、これらの諸先生の学恩の深さに改めて心を打たれる。ただ菲才の身の学恩に報いることのあまりにも貧しいのに忸怩たるものがある。この本の公刊を機会に大方の叱正を仰ぎ、残された仕事の筭杖とすることができれば幸である。

なお巻末の索引表は創文社の石川光俊氏を煩わしたものである。記して感謝の意を表したい。

一九六九年五月二十三日

武藤光朗

目次

序文

経済哲学序説……………三

1 科学の限界のもとで哲学すること……………三

2 経済哲学の可能性と体系的構想……………七

第一巻 経済学史の哲学

序論 経済学史の意味……………一九

1 現代経済学と経済学史……………一九

2 経済学史と経済哲学……………三

第一章 経済的合理性の歴史的自覚……………二六

1 プロテスタンティズムの倫理と経済的合理性……………二六

2 経済的合理性の自覚と近代自然科学の方法……………三三

3 近代国家と「自然主義」的方法……………三六

第二章 近代国家と経済的合理性……………四四

1 マーカンティリズム……………四四

2 政治算術……………四七

3 「経済表」……………五〇

4	フィジオクラット	三
---	----------	---

第三章	市民社会の経済学	六〇
-----	----------	----

1	アダム・スミスの『国富論』の思想動機——「自然秩序」と「見えざる手」——	六〇
---	--------------------------------------	----

2	「諸国民の富」と「利己心」	六四
---	---------------	----

3	自然価格の理論	六六
---	---------	----

4	労働の価値理論	六九
---	---------	----

5	市民社会の経済的メカニズム	七三
---	---------------	----

6	経済的メカニズムの合理性と非合理性	七六
---	-------------------	----

第四章	市民社会の頹廃と経済学派の分岐	八四
-----	-----------------	----

1	「古典派経済学」的世界像	八四
---	--------------	----

2	ジョン・スチュアート・ミルにおける古典派の限界	九〇
---	-------------------------	----

3	単独者、階級、国民	九六
---	-----------	----

第五章	労働者階級の経済学	一〇一
-----	-----------	-----

1	マルクスと階級的現実	一〇一
---	------------	-----

2	マルクス経済学の思想動機——疎外化された労働——	一〇三
---	--------------------------	-----

3	商品の物神性	一〇六
---	--------	-----

4	搾取の理論	一一五
---	-------	-----

5	利潤率の傾向的低下の法則と恐慌の必然性	一二八
---	---------------------	-----

6	マルクスにおける経済学的認識の限界……………	二三
第六章 経済学における国民意識……………		
1	フリードリッヒ・リストとドイツ的状况……………	一四
2	国民的生産力の理論……………	一六
3	歴史派経済学の有機体観 ^{オルグニスム} ……………	一四一
4	「価値判断論争」……………	一四六
第七章 近代経済学の基本的性格……………		
1	市民社会の頽廃と主体性への要求……………	一五五
2	主観的価値論における主体性の構造……………	一五九
3	主体性の頽落——効用理論から選択理論へ……………	一七三
4	選択理論における価値判断の排除……………	一七六
5	経済動態過程への理論的接近——「予想」の導入——……………	一八四
6	「貨幣的均衡」分析から「貯蓄・投資関係」分析へ……………	一九〇
第八章 「経済的厚生」の理論……………		
1	マースァル経済学における「時間の要素」……………	二〇四
2	欲望の貨幣的測定……………	二〇七
3	有機的成長の経済理論と経済騎士道の倫理……………	二一〇
4	ピグーの「厚生経済学」……………	二一五

5	「補償原理」と「社会的厚生函数」	三三
	ケインズ「一般理論」と不安の心理	三〇

第九章

1	「厚生」の場のメカニズム	三〇
2	「貨幣への愛着」の問題性	三三
3	貨幣利子率——不安のバロメーター	三三
4	投資機会の減少——マイダスの悲運	三六
5	節約の倫理への挑戦	三四
6	国家の新しい Agenda	三七

第十章	近代経済学と「孤独な群衆」	三五
-----	---------------	----

1	近代経済学における「人間」の問題	三五
2	経済動態過程における社会心理的要因	三六
3	国家の Agenda と「孤独な群衆」	三九

第十一章	経済政策の現代的課題——「経済的厚生」と「人間の自己疎外」	三七
------	-------------------------------	----

1	「価値自由性」の実践的意義	三七
2	「経済的厚生」と「人間の自己疎外」	三七
3	「経済的厚生」と個人主義的諸価値	三六
4	「経済的厚生」の背後にあるもの	三七

索引		一—11
----	--	------

經濟哲學序說

經濟哲學序説

1 科学の限界のもとで哲学すること

(A) 哲学することの意味

哲学することとは、私たちひとりひとりの存在意識を變革するような思惟をすすめていくということである。古来からそうであつたように、現在でも哲学する場合には、存在とは何か、ということが問われるのであるが、この問いを徹底的に問いつめることによって、私たちは自己の存在の根拠と意味に迫っていく。私たちは、自己の存在の根拠と意味を悟ることによつてはじめて、自己の存在に確信をもつて生きていくことができる。それゆえ、哲学することとは、私たちが自己の存在に確信をもつて生きていくことができるようになることを求めて思惟することである。

普通に存在というとき、ひとは客観的存在のことだけを考える。すなわち、空間と時間のなかにある經驗的に現実的なもの、物と人、道具と素材、現実態に妥当する諸々の觀念、数学的諸対象のような觀念的諸対象の退きならぬ構成、諸々の空想内容などのことを考える。しかしこれらの客観的存在は、状況の中で私によつて見いだされた存在であり、これに対して私自身は、自分が見るものであることを自ら知っている見るものである。

私がどんなに私自身を客観化する方向にすすむとしても、その客観化された私がそれに対して客観となるような私というものの、すなわち自我存在が、そこに残る。それゆえ客観的存在は、それらが私の自我存在に対して現象する限りで、私にとって存在しているにすぎない。このような現象の背後にある諸事物の存在それ自体、すなわち即自的存在は、私たちの思惟にとって近づきうるものではない。

かように存在は、形式的には客観的存在、自我存在、即自的存在に分けられる。客観的存在は果しない多様性と豊さをもつて私に対してあたえられる。それは認識可能な世界の現実態を意味する。自我存在は私にとって、直接的に確実なものであるとともに、概念的にはとらええないものであり、それが経験的現存在として私に対する客観となり、もはや本来的な自我存在ではなくなっている限りにおいてだけ、認識されうるにすぎない。即自的存在は認識にとって近づき難いものであり、また思惟にとって避けられない限界概念として、私が客観として知っている一切のものを疑問の中に引き入れるものである。何故なら、即自的存在はひとが客観的存在だけを本来的存在だと考えようとする場合、これを直ちに現象にまで相対化するからである。

(B) 科学の諸限界

それゆえ、客観的存在を認識するだけでは、存在そのものの意味はわからない。存在そのものを客観的存在としてしか考えないものは、客観的存在を認識するだけで存在そのものの意味を把握しうると考え、したがって、自己の存在に確信をもつようになりうると錯覚する。

客観的存在を認識するにあたっては、認識するものではなくて認識されるものだけが、存在として妥当する。そこでは、認識するものの個別的主観性はこの存在にただつけ加えられたものにすぎず、この附加物は極小化さ

れなければならない。これらの個別的主観性は、展望上の歪み、恣意的な評価、単なる一つの立場として、極力排除されなければならない。いいかえれば、客観的存在を純粹に認識するためには、認識するものは、すべての個別的な主観性を排除して、万人に共通する純粹形式的な意識一般に転化しなければならない。諸科学における研究は、このような意識一般の立場からおこなわなければならないべき認識の過程である。

かくて、存在を客観的存在とだけ考えるものは、科学を通して存在そのものを、したがってまた自己の存在についての確信を、握みうると考える。そこに、科学が認識するものを絶対視し、これを究極的な抛り所として科学の世界に安住しようとする傾向が生れてくる。

しかし、客観的存在はあくまで存在そのものではない。私たちが科学的研究を通じて客観的存在をどんなに純粹対象的に把握したところで、そこからは自己の存在についての確信は生れてはこない。このことは、科学的研究が突き当らなければならない二重の限界によって、私たちに明かになる。

(1) 科学的認識は、具体的状況の中で私たちがいかに生きるべきか、を教えてはくれない。このことは、社会科学についていえば、マックス・ウェーバーによる実践的価値判断排除の主張の意味するところである。

(2) 世界現実態は、果しない多様性をもって私たちにあたえられる。科学的研究の対象として私たちの関心をひくためには、それらは何らかの意義を私たちによって附与されなければならない。しかし意義づけるということは、何らかのイデーにもとづくことなしには不可能であり、そして、イデーにもとづいて意義づける主体は精神である。意識一般の営みとしての科学的認識は、イデーにもとづく精神のはたらきにみちびかれることなしには、生れてはこない。

それゆえ、諸科学の研究成果のうちに自己確信の根拠を求める試みは、科学の諸限界のもとで挫折すべく運命

づけられている。

(C) 科学と哲学

しかし、世界現実態の科学的研究は、迷信、ヒステリックな不安、政治的ユートピア、その他のあいまいなヴェールを排除き、私たちの生きていく状況の对象的な姿を、限界づけられた範囲内においてではあるが明晰に眼前化してくれる。私たちは生きていくうえで、このような状況の对象的な姿に否応なしに遭遇する。このような遭遇の経験をはなれては、現実存在としての、すなわち実存 (Existenz) としての私たちは、所詮空虚なものだけありえない。それゆえ、科学の提示する強制的知識を通じて世界現実態の对象的抵抗をできるだけ明晰に把握し、この抵抗を自己のうえに引受けるということは、私たちが実存として生きていくうえに欠くことのできない条件となる。

それゆえ、私たちが自己確信の根拠を求めて哲学する限り、諸科学の研究成果を通じて、世界現実態の对象的抵抗をできるだけ明晰に眼前化することに努めなければならない。しかし、すでに見たように諸科学は諸々の限界につきまとわれており、科学的研究からは、存在そのものの意味、したがってまた自己確信の根拠は、把握されえない。むしろ科学的諸研究の哲学的意義は、それらが限界に直面し、そのもとで挫折することによって、客観的存在を越える存在そのものへの視界を開き、存在そのものの意味と自己確信の根拠への要求を、私たちにいっそう切実な内容をもって感じさせるところにあるといつてよい。

このことから、哲学するはたらしきを本質的内容とする思想形態としての哲学は、諸科学に対して、次のような特徴によって際立たせられる。

(1) 哲学は、諸科学と同じ要求をもって、諸科学の領域のうちに一つの領域を形づくるものではない。諸科学は客観的存在の对象的把握にむかい、哲学は諸科学の諸限界を問い、それらの限界のもとでの挫折の経験に耳を傾けようとする。

(2) 哲学は、他人に対して強制的に伝達されうるような客観的存在についての普遍妥当的知識をあたえるものではない。哲学の本質的内容は、哲学する者が、彼との交りの中にある他人にむかって、ほかならぬその相手の人自身の自己確信への自発的努力を喚び起すというような仕方で語りかける、ということによって伝達される。すなわち、哲学によって伝達されるものは、客観的存在に妥当する強制的知識ではなくて、自己確信を求めて努力する他人の自由な決意によって我がものとされるような哲学する思惟のうごきである。

2 経済哲学の可能性と体系的構想

(A) 経済哲学への要求

経済哲学は何よりもまず哲学であって、科学ではない。それは、科学としての経済学と同じ平面で、経済学の領域の中に一つの領域をもつことを主張するものではない。経済哲学はあくまで哲学であるから、その本質的内容は、自己存在についての確信の根拠を求める哲学するはたらきが経済生活に即して分節化したものでなければならない。

今日、哲学するはたらきが経済生活に即して分節化しなければならないのは、現代人の生活のうちで経済生活が特に切実の意義をもっているからである。現代人が限界状況として引受けなければならない苦悩も争いも責任

も、否、死でさえも、経済生活の「場」を通じて迫ってくるものが屢々である。このような現代経済哲学への要請は、「経済哲学」の自覚的創唱者左右田喜一郎の次の一節によって言いつくされている。――

「経済生活に従うものは経済生活がいわゆるその人生である。少くともその人生の殆んど全部を占めるものが大部分である。彼らはこの土に生を享けてより漸く労働の能力を有する頃からその死にいたるまで、営々として単純に他の文化生活のための準備行為のみをなしつつあるものなりとは如何にしても余には首肯し得られない。……苟しくも人生とは何ぞやの一般的問題に思を潜むる思想家に対して、……経済生活の意義を究明するはやがて人生一般の意味を悟るゆえんであって、これいわゆる物の一端を叩いてその全貌を察するものである。敢えて問う、人生をもって不可解の謎なりとするものは、それが米価の暴騰に苦しんで『米騒動』を敢えてした無産階級の経済生活について、果してよく既に謎ならぬ何ものかを捉え得たりや。」（『価値生活としての人生』『文化価値と極限概念』大正十一年刊、八〇頁）。

今日、あえて「米騒動」を引き合いに出すまでもなく、貧困、失業、工場労働の即物化、操作される消費欲求、豊富のなかの自己疎外、等々を、単に客観的対象的にだけでなく、働く人びとの切実な人生問題として共に悩む心のあるほどの人なら、経済生活に即して哲学することが現代人の人生に対してもつ意義の切実さを認めないわけにはいかないはずである。

(B) 経済哲学の体系的構想

かように現代人にとっての経済哲学への要求の切実さを認めるとしても、それだけでは現代経済哲学の可能性を実現する道が示されたことにはならない。現代経済哲学の可能性を主張するためには、その体系的構想の輪郭